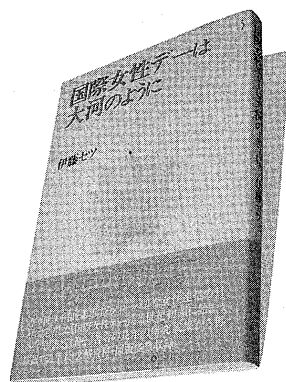


伊藤セツ著

『国際女性デーは大河のように』

上野和子



2003年8月22日発行
御茶の水書房
A5判 186頁
定価2600円(本体)

ソ連が崩壊して、テロの拡散とその戦い、エネルギー資源をめぐる政治戦略、ボーダーレスな金融と情報の流れなどの展開は、従来の近代国家とその国民という概念をゆるがして、あたらしい「帝国」の出現かという課題をつきつけている。

欧米諸国の女性運動も、この地球規模の現象から免れていない。元来、国民国家の枠組みで、政治的経済的な男女平等を主張してきたフェミニズム運動は、二〇世紀後半、さらに生活や文化の面で女性の視点を入れた運動を活性化し国際的な協力を呼びかける段になって、このボーダーレスの波に洗われた。現在、ポスト植民地主義や男女の差異などの問題に直面し、女性運動は多様な主義主張に分断分派化しているように見える。しかし人権を主張してきた「第一波フェミニズム」も決して一枚岩ではなかった。女性史の観点からだけでなく、歴史と文化比較の視点からも、貴重な文

献が忘却の流砂に埋もれるのを危惧した伊藤セツ教授が、「国際女性デー」成立を核として、欧米諸国における女性運動の協力や融合の道筋をたどったのが本書である。

「国際女性デー」は、どのようにして決められたのであろうか？ 一九七七年に、国連総会で決議されて以来、日本でも最近「国連の日」として様々な行事が持たれている。しかし、この日の歴史や成立には、多くの人間の情熱や祈りがこめられていることを理解している人は少ない。この問いを、著者は二〇世紀前半の女性運動の台頭後、その国際的な結びつきを通して、「国際女性デー」が国連活動に継続されていったことを、歴史上の本流として解き明かした。本書は、実際、二〇世紀初めのアメリカ社会党女性部の運動、欧州における社会主義者の第二インターナショナル、ソ連

のコミンテルンの活動、そして日本では社会党議員山川菊栄などの活動に連なる女性運動の伝統であったことを立証し、さらに貴重なドキュメントを介して活動家の声を再現する、地球規模の壮大な女性運動史絵巻をつむぐ野心的な試みである。

本書は、各章に重要な資料とともに興味深いエピソードを配している。第一章では、「国際女性デー」が先進諸国の意志に屈しているかに見える国連で、「植民地主義や人種差別に反対するため」に「当時の社会主義国や開発途上国の主導によって提案され採択されたこと、従ってアメリカなどの先進諸国は反対し、日本は棄権にまわった経緯が語られる。しかしガリ事務総長の時代、国連は「難民の女性」へ女性と環境」など女性の社会的な地位向上を運動目標にし、一九九二年には三分の二以上の加盟国が「女性に対するあらゆる形態の差別撤廃条約」に署名する結果となった。

第二章では、国際女性デーの始まりと考えられる、二〇世紀初頭の、アメリカ社会党の女性運動が紹介される。当時、女性参政権運動が大衆運動として盛り上がった時期であった。サフラジェットトの過激な戦略もあり、中産階級の女性を中心にあった全米女性参政権協会(NAWSA)は女性労働組合連盟(WUTL)、富裕層や専門職の女性も巻き込み、野外集会やパレードを実践した。

アメリカ社会党の女性部は女性参政権運動を推進させるため、毎年二月の最終週の日曜日に、ニューヨークなどで集会をもった。党機関誌『プログレシヴ・ウーマン』や日刊新聞『ニューヨーク・イヴニング・コール』の記事を資料に、著者はシャーロット・ギルマンや労働組合出身の運動家ローゼ・シュナイダーマンなどの演説がカーネギーホール集会で行われたことを披露する。それと共に三月八日の「国際女性デー」を政治的に利用しようとする、アメリカ側の伝説形成も紹介される。一八五七年のニューヨーク織物女工ストライキという架空の話である。いかにもほら話（Hairy Tale）の得意なアメリカ人が彷彿とするが、著者は当時の資料に当たってこれを事実無根とした。だが、しばらくの間、相当量の論文がこれを支持していたらしい。

第三章では、第二インターナショナルによる国際女性デーの決議が語られる。著者はこれこそ女性史上、「女性運動のために国際的な共同行動を定義した」と最重要視している。社会主義者による第二インターナショナルは、一九〇七年のシュツットガルト大会で初めて女性の公的会議をもち、一九一〇年にはコペンハーゲンで十七カ国から約百名が参加している。女性の地位向上・反戦を唱えたクララ・ツェトキン、アウグスト・ベーベル、

アレクサンドラ・コロンタイ等の活躍が熱く語られる。すでに第一次世界大戦の危機が迫り、社会主義指導者たちは、祖国擁護派と革命支持派の間をゆれ動き、その闘争力が減退し始めた時期ではあった。しかし国際女性デーを記念する行事は、毎年広まり、デンマーク、オーストリア、スイス、オランダ、ロシア、チェコなどで記念行事がもたれた。写真の資料によると黒いコートを着た女性たちが、凍てついた雪道に集まっている。ドイツ非合法化社会で命がけの社会主義革命運動、そしてローザ・ルクセンブルクの情熱的な演説が集会の人々を圧倒する逸話も挿入される。

第四章では、国際女性デーがソ連の第三インターナショナルにより受け継がれたことが語られる。女性労働者を共産主義運動に引き入れる目的でレーニンらは国際女性書記局を設置した。局長クララ・ツェトキンは毎年「万国労働女性への呼びかけ」を発表し共産主義諸国に、三月八日ロシア革命を記念する女性デーの組織化を指導し遂行状況の把握を試みた。一九二一年、国際共産主義女性会議には、二十八カ国の代表八十二名が集まり、国際女性デーを三月八日と定めた。その後、欧州の共産圏では国際女性デーの行事が続けたが、第二次大戦のファシズムや帝国主義戦争の流れ、ソ連国内のセクト主義、スターリン個人崇拜という

政治闘争に吞みこまれていった。

第五章の日本における「国際女性デー」では、戦前・戦後にわたる社会党議員山川菊栄の活動、そして第二次大戦後のGHQ指導下での女性運動の動き、そして七〇年代のウーマンリブの台頭などが紹介されている。

著者は、クララ・ツェトキンやアウグスト・ベーベルの研究者でジェンダー統計の専門家として活躍し、学生時代から国際女性デーの運動に参加している。それだけに社会主義運動の遺産については、マグダーマットとアグニエューの言葉を用い、「多くの否定的現象の中に肯定的な特長が存在する」ことを認めなければならないとする。また、特に国際女性デーは、「女性」と「平和」の双方を掲げて初めて意味のあるものとなると結論している。著者のメッセージは次のとおり。

「現在地球上、どれだけ女性が、国際女性デーにかかわっているか計り知れないものがあります。英語の「国際女性デー」をインターネットで検索しますと、何十万件もヒットします。女性デーは大河となった歴史の中を流れ続けるのです。」

国際女性デーは、「新たな歴史の可能性を予感させる」という言葉で結ばれている。

（うえの かずこ 人間文化学科）